

---

## アルス国際製靴学校研修体験記

日程：令和5年9月2日-11月11日（71日間）

場所：アルストリア国際製靴学校（イタリア・ミラノ）

HARUNA OTA

島田 竜太郎

---

### 学校について

世界的なコロナウイルス蔓延の影響を受け、本研修も4年ぶりの実施となりました。またその間、アルストリア国際製靴学校(以下、「アルス」という。)においてもコースの再編や研修内容の変更がありました。

私たちは10週間のコース「Women and Men's pattern making and prototyping」を受講し、アルス式の型紙作成技術を学びました。

9/2（土）に羽田空港を発ち、日曜日の昼にはイタリア・ミラノに到着。翌月曜日から研修が始まりました。

このコースに集まった生徒は、イタリア、イラン、インド、ウクライナ、コロンビア、スペイン、ニュージーランド、フィンランドから私たちを含めて13名。あいさつや自己紹介をすると、親族が靴工場を営んでいたりデザイナー志望や国の支援を受けて参加している方など様々なメンバーでした。また、私たちが受講したコースの終了後、シューズデザインコースなどを続けて受講し最長1年在籍予定の生徒もいました。

あいさつが終わると、さっそく型紙作成の講義が始まります。講義はプロジェクターで映された講師の手元を見ながら説明を受けて、その後各々が実践していく流れで進みました。講師はスペイン出身で、英語とイタリア語を交えて説明してくれました。講義日程は月曜日から木曜日の週4日

間、9時から17時にかけて行われ、それ以外に製靴に関する基礎知識などの録画された講義動画を各自で視聴しました。

最初はプレーンパンプスから始まり、ダービー、サンダル、オックスフォード、ローファー、アンクルブーツ、ロングブーツなど、靴種ごとに木型や細かなデザインを変えながら繰り返し型紙を作成しました。

教室には様々なデザインのサンプルがストックされ、必要に応じて解説にも用いられ型紙の理解に役立ちました。

アルスの型紙はこれまでの研修生から聞いていたように、平面での作業が中心でした。まず木型の立体面をテープを用いて平面化し、ベースシェルと呼ばれる原型を作ります。原型をデザインに合わせて微調整した後、デザイン線を平面上に落としていきました。イタリアでは、紳士靴の型紙を作るときは、ほとんどこの手法が用いられ



授業風景

ているとのことでした。これまであまり経験がなく平面上で立体物のラインを表現するのが最初は大変でしたが、慣れてくると綺麗なラインも引きやすく、原型があれば様々なデザインに対応できるためとても効率的だと感じました。

## 授業について

毎週月曜日には簡易テストがあり、前週に習った技術を応用して型紙を作成し、さらに細かな仕様も決めて裁断型や補強材などの型紙を作成することもありました。また、作成した型紙の組立てを確認するため、製甲や底付け工程の実践もありました。それぞれ別の講師が加わり、より専門的な知識を交えながら講義が行われました。その際、珍しい機械や最新の機械を体験することができました。

学外の見学もいくつか行いました。革の見本市「LINEA PELLE」や靴の展示会「MICAM」などは自由参加でクラスメイトとともに回りました。ここ数年に比べてかなり来場者が戻ってきているようでした。

また、ミラノ郊外にありフランスの高級靴を生産している婦人靴工場Roveda1955を見学しました。イタリアにおいても工場の経営は難しく、ブランドなど大手資本の支援を受けており、再建された工場はとてもスマートな印象でした。授業としての見学以外にも、クラスメイトであるイタリア人家族が経営する靴工場にも見学させてもらいました。こちらでもイギリスの高級婦人靴を生産しており、高級靴の輸出大国であるイタリアの現場を見ることができました。工場のあるビジェバノ市はミラノから電車で1時間ほどで、古い街並みを残しながら靴生産の地域として栄えており、靴の博物館もありました。

11月末には2日間かけて卒業試験が行われました。初日は型紙作成の実技試験で、紳士・婦人どちらかを選んだ上でくじ引きによりデザインを決めて取り組みました。2日目は生徒が2人一組となり講師1人と口頭での試験で、靴や革に関する知識や前日に作成した型紙についての質問を受けました。試験が終わると卒業後の仕事に関する話を話したりと、講師の先生には講義中を含めて終始親身になっていただきました。

最終週にはCAD (Engineer-Shoemaker : ATOM社) を用いた型紙作成を行いました。PCルームで割り当てられたPCにて録画講義を見ながら、パンプスやオックスフォード、ダービー、サンダル、スニーカーの基本形を作成しました。また、グレーディングや裁断型のデータまで作成し、学校に備えられた自動裁断機で実際に型紙や革の裁断まで経験しました。

## イタリアでの生活について

1ユーロは160円近くのかかなりの円安状況でした。ペットボトルのお水は50c~1.5€位でした。イタリアでは正規の両替所でも日本円を両替する際は手数料が20%位かかり、その上レートも厳しいので、日本でユーロに両替しておくべきだと学びました。

また、携帯のネット環境ですが、私達は日本から事前にe Simを携帯に事前ダウンロードしておきました。現地の学校、寮では少し遅いWi-Fi環境がありました。

私たちはヘルシンキ経由にてミラノ・マルペンサ空港に到着しましたが、空港からの電車の乗り方はOmioというヨーロッパ全体の交通アプリで、路線検索から電車やタクシーなどの予約ができます。空港から最寄りの駅までは15€で空港特急があります。切符を買うか携帯アプリでの購入後、

乗車します。

滞在先のドーム(生徒寮)が改修中であったため、最初の2週間は家族で住めるようなバスラブ、キッチンが付く広い部屋でしたが、私達はドーム契約であったために途中で部屋の移動がありました。急ピッチで未完成のドームに変更になる時は少し戸惑いがありました。

## 新ドーム生活

何もかもが新しく改築されているドームは1Fフロアを1ルーム単位で区切り、キッチンが共同で一人部屋も約18㎡程で収納棚と家具も備え付けの新品でした。

洗面台とシャワーとトイレが各一人ずつについています。洗濯機を使う際は地下まで行く必要があります。急な改装だったため、未完成な部分が多く、また、ベッドが子供サイズだったり、照明、空調設備が動いていなかったり、備品や窓際のサッシが入っておらず室内が外気に晒されたままだったりするため、蚊や騒音など、クラスメイトの同じ寮生達と困っていることを話し合い、レジデンス(アパート全体)の担当者にちゃんとするよう相談をしたり、気になる点を交渉したりする必要がかなりありました。今後は無いと思います。

リネンや掃除は週に2回で、また、工事途中なので、作業、メンテナンス、チェックなどのために知らない方が入ってくることが結構ありました。また、すべて新しい部屋になる代わりに設備の不備などの交渉をしっかりと積極的にコミュニケーションしなければ、改善されない、又はいつまでたっても変わらないことなどは明白で、集中して授業に向き合うためには、生活環境面での対応が大切であり、このような違いで海外に来たんだなと実感する次第でした。

同じ寮での同期のクラスメイトとの生活

は、一人部屋のバラバラな時よりも、一緒にごはんを作ったり、ランチを食べたり、展示会や様々な話ができ大変友情が深まりました。中でも言語が少し難しくても卓球台を自作したり、世界共通の息抜きとして無機質な寮の中でヨガやピンポンを工夫して一緒に楽しむことで国を超えた友情が芽生えたことはとても良かったと感じました。共同生活ではゴミの分別や騒音、冷蔵庫、電気やキッチンは毎回配慮をすることが必須でしたが、私達が日本人として清潔を保とうとすることや、こちらの気遣いに対してとても率直なリアクションで感謝をダイレクトに伝えてくださることが多く、大変良好な関係と充実した寮生活を送ることができました。



ドーム(寮)生活

## クラスメイト

ほとんどの生徒がイタリア以外の国から参加し、各国にて家族が靴工場やブランドを営んでいるなどの関係が多い中で、唯一自国イタリアのクラスメイトが一人いました。ミラノから1時間程にある、日本という浅草のような靴メーカーが多く集まっている街Vigevanoから通うクラスメイトは日本のアニメがとても好きだったこともあり、大変親切に交流してくれ、普段なら一般人は到底入れないご家族で営まれている超高級靴の工場見学も企画してくれ

ました。

また、街の靴の歴史博物館も案内してくれました。日本の浅草の台東分校と同じ建物にある靴資料展示室（かわとはきものギャラリー）の10倍程あり、デザイナーのTOKIO KUMAGAIなどの靴や世界各国の歴史的価値のある靴が展示されていました。

街は、世界的な有名ブランドの靴など昔から各工場で作られている、まさにイタリアのミラノにほど近い靴の生産の第一線として誇りがある様に見受けられました。世界各国からも靴関係者が街の様々な靴工場と交渉したり、製靴機械メーカーの本社などが集まっている、そんな街でした。

戦火の中、ウクライナから来たクラスメイトもいました。彼女はAnatomical shoes（解剖学的な靴）、人間の足本来の形に近い靴の追及を行っていました。

また、インドからも複数のクラスメイトが来ており、大きな工場を持っている家庭の子や最新の3Dプリント技術といったITを駆使した靴で起業を目指す子など、まさにインド経済の勢いを交流を通じて目の当たりにしました。一口にインドといっても広いので、各地違う言語なため、インドから来た子達の意味疎通は英語でした。スペインからは実家の靴工場にはデザイナーは沢山いるが、型紙ができる人は少ないからと、修士卒業とマーケティング会社と二足の草鞋を履きながら勉強に来ている子もいました。

南米コロンビアの子はすでにファッションデザイナーとしての靴や服などの専門知識があり、その上で靴の型紙も勉強しに来ていました。

フィンランドから来た子はすでに3年間靴の専門学校に通っており、自作のハイ

ヒールを顧客に届ける程の腕前を持ち、クラスで一番型紙に熱い情熱を注ぐ素敵な姿勢を学ぶことができました。いつか自国で靴の先生になりたいと仰っていました。

ニュージーランドから来た子はイギリスの大学で経済学を勉強したあとにファッションに興味を向いてイギリスで靴を学び、その先生から勧められてアルスの1年コースに入校していました。私たち日本人が一番短期間の受講でした。

様々なバックグラウンドを持つこの子たちから何故この学校だったのかを聞くと、やはり口を揃えて世界中でこの靴学校が一番有名だから、歴史があるから、ここに来て学ぶことは業界では名が知れる有意義なことで、自国に帰る際や自国の靴業界に対してとても誇らしいというような回答がほとんどでした。

様々なバックグラウンドから考察すると、世界中の靴業界は今、世代交代が起きており、優秀でボーダレスな若手人材が育つ環境としてアルスは無くてはならない存在だととても実感しました。グローバルとローカルを常に考えるグローバルな感覚で若手人材達が越境し、世界中で靴ビジネスの市場を展開し、それぞれの特性を生かすことができる、そんな全世界視野の靴経済。アイデアやモノづくりの視野を学校を通じて各国の文化や背景と共にクラスメイトと切磋琢磨し、各国の靴業界の違いなどを直接話し合い、助け合いながら専門知識を深めることができた経験は、専門性を俯瞰して深める上では無くてはならない視野の拡張になったと思いました。

また、日本文化の特徴に各国クラスメイト達が興味津々な様子からは、正確な情報を伝える必要性を感じました。

さらに、授業の際、なぜそうするのか？といった質問を講師に投げかけることで

「あなた達が来てくれて授業に深みが出た」というような講師からのラブコールや信頼を獲得することができたのも、細事をおざなりにしないという日本人気質に帰属する部分があるのかもしれないと感じました。

こういった交流や研修は、どの業界であっても、専門性の高い分野ほどもっと多くの日本人の技術者が世界に出て学び伝える必要があることも強く感じることができました。

### M I C A M & M I P E L

2023年09月17日～2023年09月20日

前回より多く約1800ブランドが出展。靴の国際見本市も今年から初となる試みとしてM I C A M X（エックス）と題し、最新技術やテクノロジー、素材などのトレンド情報を今時のライブ中継したり、紹介していました。また、世界中で審査され、勝ち抜いた若手靴ブランドデザイナー、靴起業家を全面的にバックアップした内容のものでした。

携帯アプリで出展社、イベントなどが便利に検索できました。世界の中から一人日本人の女性も見事選ばれており、私たちはタイミングよくお話できる機会がありました。

また、イタリアの首相やイタリア靴業界のトップが登壇するトークセッションでは、やはり若手人材の育成について多大なるシフトチェンジと育成に向けてのサービス、スタートアップ、工場とのデータベース化など、各国の数字を交え、大変興味深い発表内容を聞きました。

イタリアが国の産業として靴業界にどれ程重きを置いているのか、国際輸出入経済との関係性も発表し世界各国との様々な靴経済の比率なども交えながら国と産業界のリーダー達がトークをされていたことはと



M I C A M

ても印象的でした。若手育成のために惜しみないといったような内容も多く、背景にはイタリアも工場で働く若手人材不足が起こっていて、靴業界への若手の興味や関心をどう惹きつける術があるかを模索しているという印象でした。

各国のブースを見渡し、話を聞くと、今回初出展だというブランドも多くあり、中でもギリシャはギリシャらしい伝統的なサンダルや新規の文化的要素のあるスモールブランドなども目立ちました。そこからの印象として、日本の伝統的な雪駄や文化的背景の強い新しいデザインなどの展示があればかなり引き合いがありそうだと感じました。

コロナからの復活として勢いを取り戻すかの様に各国からの出展が多い中、日本からの出展は1～2社程しかなく、アジアの中でもかなり少ない出展数だったことが残念でした。

また、展示ブースの魅せ方や販促物などもとても重要かつ戦略的になる要素が沢山あり、あるブースではブランドが作るアイスクリームやその場で商談に持ち込める引き込まれる工夫やおもてなしなど、展示会での伝え方が様々でした。世界と商談、受発注を行うにあたって販売促進の展示会での工夫が重要だと強く感じました。各国の

様に交渉力に長けた日本人の人材や目新しい日本のスモールブランドなどが出展できる仕組みがあればとても有利な状況になるのではないかと想いました。現に日本人女性のデザイナーは沢山の引き合いやインタビューで忙しそうにしており、世界的にも差別化を図りたいバイヤーや商社にとって日本の新たなブランドへの発掘意欲や需要は一定数あることを展示中の会話などからも感じ取ることができました。

これだけのポテンシャルがあるにもかかわらず各国に比べ我が国の出展数が少なく、日本の靴ブランド全体のPRができる場が少ないのは大変もったいないと感じました。

円安も含め今、海外勢にとって日本との貿易に前向きになりやすい良い風向きと認識している海外と興味を持ってくださる各国に対して新しいバラエティ豊かなアプローチで沢山仕掛けていくことが日本の製靴業界への足がかりになるのは間違いないと確信した次第でした。

## LINIAPERRE

2023年9月19日～9月21日

私たちは展示会見学前に授業として、リニアペレ本部にてイタリアの皮革産業における基本的な知識を沢山の革見本のあるショールームにて説明を受けました。

それを踏まえた上で、展示会では今年のトレンドの素材や様々な革業者、資材業者が世界中から来ており、1日では時間が足りない程でした。

目を引いたのは、初出展となるLVMH(モエ・ヘネシー・ルイ・ヴィトン)グループ傘下の素材メーカーと革メーカーが合同で豪華な出展をしていたことです。中央にはクロコダイルを目玉とした芸術的な革が展示されていました。また、グループの総金

具を任されている会社もイタリアであることを知りました。

他のブースでは、日本との取引もある老舗ドイツ革メーカーがトレーサビリティを完全に見える化したシステムでどの牛からどう革製品ができたかが携帯アプリでわかるようにした最新システムと革のサーキュラーエコノミーと価値を考えたドイツらしい環境配慮の最新動向が勉強になりました。

革を余すことなく使うことと大切に扱うことの重要性を、説明責任として明確化してこそ最終消費者が大切に使うことにも繋がるといった内容を教えてくださり、そういったシステム構築は至難の業ではなかったですか？と聞くと、ドイツ政府やドイツ国民が望んでることだったからできたんだよと教えていただいたことが印象的でした。

生活としてはやはり、円安が大変痛手ではありました。近くにミラノの最新スポットCity Lifeという複合ビジネス商業施設があり、そのスーパーマーケットが食材も豊富でおすすめでした。EU全土だと思えますがオーガニックやヴィーガン食材が豊富で、サステイナブルの観点からもゴミの分別が細かく厳しかったです。

イタリアでは皮革のグレードや品質管理、ヴィーガンレザーなる名称は本革では無いので商標として使えないなどの厳しい規則がありました。日本も消費者の混乱を避けるためにも表記方法を変える必要があるのではと思いました。

また、ミラノは世界やイタリアでも屈指の美術館、博物館、歴史的建造物、ファッション施設などが数多く存在しているので、学校が終わる夕方5時以降や講義のな

い金曜日に行くことも多く、大変充実した日々を送ることができました。美術館などで目を見張るような歴史や文化、様々な工芸、モノづくりを直接見ることで、イタリアの木型や靴のきれいな曲線美やラインは歴史が積み重なって織りなされているんだなど考察することができました。



ミラノの風景

今回の研修は、選任されてから約3年以上コロナと重なり、私たち二人ともに、数年間いつイタリアの派遣が実現するのか、キャリアや生活やその間の仕事など先がかなり見えづらい状況でした。毎年の子定を半年後などに修正をしなければならず、周囲の応援や支えが無ければ、このような保証も子定も見えない日々を乗り越えることは到底不可能でした。

今回のイタリア研修期間以上の数年の想いや生活が掛かっている人生においても重要なターニングポイントではあったことは間違いありません。

コロナ禍は、人々が外やデパートに買い物に行かなくなり、靴業界の経済に一層暗い影を落とした時期であったことは歴史的にも残して置きたい記録だと感じています。

コロナ禍を経てさらに時代が大きく変化しようとしている中、当事者として今回の

研修に参加できたことは、今後の新しい未来に向けて世界がどのように動き出そうとしているのか、また、何が大切なことかを理解する上で、さらに、靴業界や日本のモノづくりにおける新たなきっかけづくりを考えていく上で、大変有意義でとても重要だったと感じております。

このような機会を与えてくださった東京都並びに東都製靴工業協同組合に対し、心より感謝申し上げます。



クラスメイト